

長野県更埴市粟佐遺跡群

五輪堂遺跡Ⅳ

—長野県屋代南高等学校特別教室棟建設に伴う発掘調査報告書—

1987

更埴市教育委員会
更埴市遺跡調査会

長野県更埴市粟佐遺跡群

五輪堂遺跡Ⅳ

—長野県屋代南高等学校特別教室棟建設に伴う発掘調査報告書—

1987

更埴市教育委員会
更埴市遺跡調査会



序

五輪堂遺跡の発掘調査は今年度の調査で7回を数え、次第に遺跡の全貌を現わしつつあります。五輪堂遺跡は現在でも多くの人々が生活する千曲川の中洲状微高地上に所在しており、生活に適した土地としての歴史は長いものといえます。しかし砂層によって厚く覆われた住居址をみると、当時から人々が千曲川の洪水に悩まされていたことがわかります。

今後高速道路、新幹線等の建設に伴う道路、工場等の建設は、市内の遺跡に多大な影響を与える事と思われます。そうした中で埋蔵文化財を守り、後世に伝えていくことが、現在生きている私達全てに課せられた使命であり、市文化財保護機関としても精一杯努力する覚悟であります。

調査を無事終了することができましたのは、屋代南高等学校小松一弘校長先生、教職員のみなさん、作業に参加された作業員の方々の御協力と御努力の賜であり、厚く御礼申し上げます。

昭和62年3月31日

更埴市教育委員会教育長





更埴市遺跡調査会長

安藤 敏

例言

- 1 本書は、昭和61年10月14日から同年12月23日の間に、長野県屋代南高等学校特別教室棟建設に先立って実施された、発掘調査報告書である。
- 2 調査は山根洋子が担当し、遺構実測は村山豊、田中富子、矢島宏雄、山根が行った。
- 3 本書の編集は山根が行い、実測、トレースは出河裕典、前島卓、田中、山根が行った。
- 4 執筆は山根が行った。
- 5 出土遺物及び遺構については、上山田小学校教諭森嶋氏の御教示を得た。
- 6 本調査の出土遺物、実測図、写真等は全て更埴市教育委員会に保管されている。
なお本調査関係の資料には、五輪堂遺跡南高地点第4次調査を略し『GRMIV』と表記した。

凡例

- 1 遺物写真図版の縮尺は1:2で、写真中の番号は実測図の図版番号を示す。
- 2 遺構・遺物実測図に用いたスクリーン・トーンは下記の意味を表している。
遺構 焼土  灰・炭化物 
タキシメられた床面 
遺物 黒色処理された土師器 
- 3 遺物図版番号の○は須恵器、□は灰釉陶器を表している。

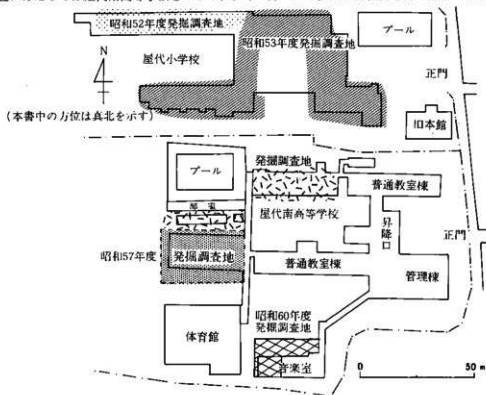
目次

I	調査に至る経過	1
II	調査の概要	2
III	調査日誌	3
IV	遺跡の環境	4
V	遺構と遺物	7
VI	まとめ	17
VII	図版	19

I 調査に至る経過

昭和60年10月、長野県屋代南高等学校より特別教育棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査について、61年9月末に取壊しを行うので10月に発掘調査を実施してほしいと依頼があった。市教育委員会では長野県屋代高等学校の発掘調査と調整を計り、発掘調査計画を作成し県教育委員会の指導を仰いだ。12月に入り、県教育委員会より当該遺跡の保護について、費用2,900,000円で390㎡以上の調査を実施するよう指導があり、市教育委員会ではその旨を長野県屋代南高等学校に通知した。昭和62年6月、長野県屋代南高等学校より特別教室棟の建設に合わせて部室の建設も実施すると連絡があり、市教育委員会では改めて発掘調査計画書を作成し、県教育委員会の指導を仰ぐと共に調査の準備を開始した。県教育委員会より、部室建設部分も含め費用4,350,000円で600㎡以上の調査を実施するよう指導があり、昭和61年10月1日、長野県屋代南高等学校と更埴市との間に発掘調査委託契約が結ばれ、さらに更埴市と更埴市遺跡調査会との間に同様な契約がなされた。10月13日に発掘調査通知（98条2）を提出し、10月14日より発掘調査を開始した。

発掘調査は、更埴市より委託を受けた更埴市遺跡調査会が発掘調査団を編成し、実施した。調査にあたっては屋代南高等学校をはじめ、多くの方々より多大な御協力を得て無事に終了した。



第1図 五輪堂遺跡調査地

II 調査の概要

- 1 発掘調査委託者 長野県原代南高等学校（長野県）
- 2 発掘調査受託者 更埴市・更埴市遺跡調査会
- 3 発掘調査実施者 更埴市教育委員会・更埴市遺跡調査会
- 4 発掘調査場所及
び土地の所有者 更埴市大字屋代2,104番地
長野県屋代南高等学校（長野県）
- 5 発掘調査遺跡名 あはせ 兼佐遺跡群五輪堂遺跡（市台帳No.18-28-1）
- 6 調査の目的 公共事業 屋代南高等学校特別教室棟建設に伴う当該遺跡の記録保存
- 7 調査期間 昭和61年10月14日～同年12月23日（65日間）
- 8 調査面積 600㎡（工事面積508㎡）
- 9 調査方法 グリッド調査法（3×3m）
- 10 調査費用 費用総額4,350,000円（全額委託者負担）
- 11 調査会の構成
 - 会 長 安藤 敏 更埴市教育委員会教育長
 - 理 事 田沢祐一 更埴市議会議員
山崎 衛 更埴市教育委員会教育委員長
松林光幸 更埴市市長会長
寺沢政男 更埴市役所総務課長
 - 監 事 武井隆義 更埴市社会教育委員会委員長
関 京子 更埴市役所会計課長
 - 幹 事 武井豊茂 更埴市教育委員会社会教育課長
山崎文夫 更埴市教育委員会社会教育係長
矢島宏雄 更埴市教育委員会社会教育主事
- 12 調査団の構成
 - 団 長 安藤 敏 更埴市教育委員会教育長
 - 調査指導 森嶋 稔 上山田小学校教諭
 - 調査担当者 山根洋子 更埴市教育委員会社会教育課
 - 調査参加者 牛沢一子 小林文江 坂口城子 篠崎節子 関野 斉 田中千枝子
田中富子 多羅沢まつ子 塚本 潔 徳永 博 杉津春英 村山 豊
 - 整理参加者 青木美知子 牛沢一子 小林昌子 武井裕子 田中富子 田中宣子
中村ちよ子 出河裕典 前島 卓
 - 調査協力者 長野県屋代南高等学校
 - 事 務 局 武井豊茂 山崎文夫 矢島宏雄 佐藤信之 田中啓子 山根洋子（社会教育課）

Ⅲ 調査日誌

五輪堂遺跡屋代南高校地点第4次の発掘調査は、10月14日から雪の中12月23日まで、65日間にわたって行われた。校舎の敷地内のため攪乱が著しく、遺構の状態が懸念されたが、切り合いながらも多数の遺構を検出することができた。11月に入ると日没が早くなったため、11月5日より昼休みを短縮し、作業終了時間を早めた。11月18日に調査1区の全景を撮影したのち、排土場所を確保するため11月20日に埋戻した。11月20・21日には調査2・3区の表土剥ぎを行い、その際調査2区より10枚重なった土師器墨書土器が出土している。11月26日にはついに初雪が舞い、ベルトコンベヤーは酷使のためエンジンが焼き切れてしまった。どんどん気温が下がり、1日中陽の当たらない調査3区は、1度凍ってしまうと終日手がつけられなくなった。12月16日、遺構の検出がほぼ終了し、実測を残すだけとなり、21日には実測も終了。12月22・23日に重機による埋戻しを行い、現場作業を終えた。

調査日程

- 10. 14 重機による表土剥ぎ
- 10. 15 作業員が入り掘り下げ開始
- 10. 20 造り方設定を始める
- 10. 23 実測開始
- 11. 4 雨のため作業中止
- 11. 5 作業終了時間変更
- 11. 11 雨のため午前中作業中止
- 11. 18 校舎屋上から写真撮影
- 11. 20 1区埋戻し2・3区表土剥ぎ
- 11. 21 引き続き3区表土剥ぎ
- 11. 26 初雪
- 11. 28 2・3区造り方設定開始
- 12. 15 雨のため作業中止
- 12. 16 遺構掘り下げ終了
- 12. 19 雨のため午後作業中止
- 12. 21 実測終了、機材撤収開始
- 12. 22 重機による埋戻し
- 12. 23 埋戻し完了、現場作業終了



第2図 調査風景

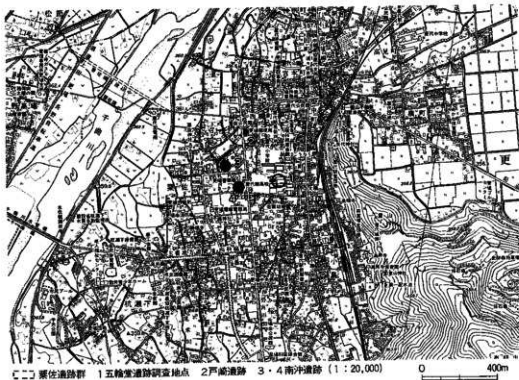
Ⅳ 遺跡の環境

粟佐遺跡群は、北流する千曲川が北東に流れを変える屈曲部に形成された、標高360m前後の中洲上に展開している沖積地の遺跡群である。規模は東西0.5km×南北1kmほどで、これまでに屋代小学校改築に伴う五輪堂遺跡調査（Ⅰ次1977年・Ⅱ次1978年・Ⅲ次1982年）、屋代南高等学校改築に伴う五輪堂遺跡調査（Ⅰ次1980年・Ⅱ次1981年・Ⅲ次1985年）をはじめとして、戸崎遺跡（1977年）、南沖遺跡（Ⅰ次1980年・Ⅱ次1985年）等の発掘調査が実施された。弥生時代から中世に至る大集落遺跡であることが確かめられている。

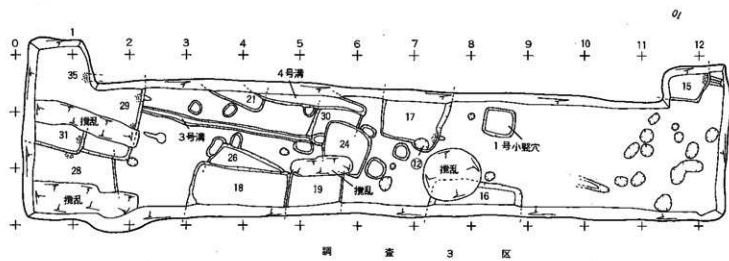
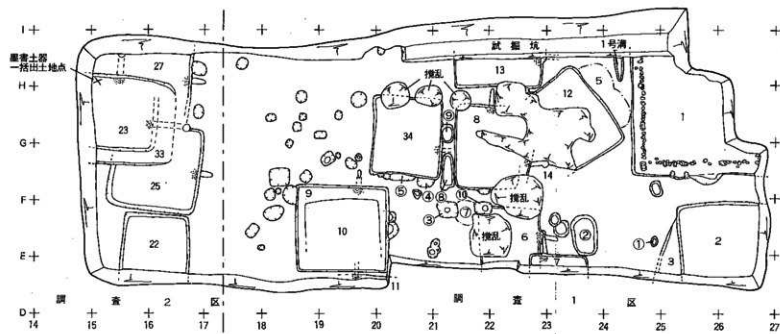
近隣には奈良～平安時代の集落址・水田址を検出した馬門遺跡^{馬門}、古墳～平安時代の集落遺跡である城ノ内遺跡^{城ノ内}、弥生～平安時代にかけての集落遺跡の生仁遺跡^{生仁}、などを擁する屋代遺跡群や、条里遺構、森將軍塚古墳、屋代城址などの遺跡が分布している。

五輪堂遺跡は、これまでの6回の発掘調査により、住居址127棟、掘立柱建物址9棟、方形周溝墓、火葬墓、馬の墓、堂址、溝址、土壕などの遺構を検出し、多数の遺物の出土をみている。

粟佐遺跡群は市街地に所在しており、今後の開発によって環境が変質することが予想される地域である。

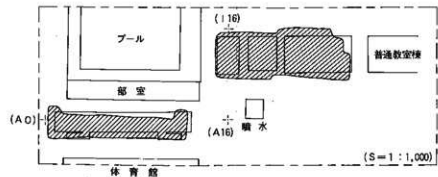
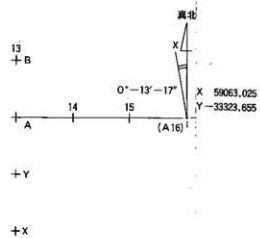


第3図 発掘調査位置図



数字 住居址
○数字 土壌

10m



第4図 遺構全体区

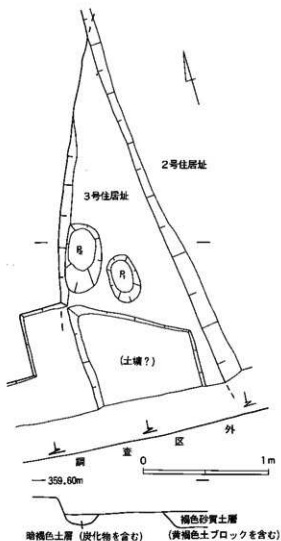
V 遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、古墳時代の住居址3棟、奈良時代の住居址1棟、平安時代の住居址29棟のほか、小竅穴、土塚、溝などである。校舎建設の際の攪乱が著しいうえに遺構どうしの切り合いが多いため、内容を把握しきれなかった遺構もある。

3号住居址 (第5図・図版1)

遺 構 調査1区の南東で2号住居址に切られて検出された住居址である。規模・主軸等は不明であるが、ピットを2つ検出している。

遺 物 1は片口をもつ坏であるが、おそらく高坏になると思われ、内外面にいねいなミガキが施されている。2・3も高坏の脚部で、2には内外面赤色塗彩が施されており、2・3共にナナメのミガキ痕が認められる。4～7は甕で、4～6には波状文がのこる。4の頸部には簾状文がみられるが、5・6の頸部には原体を途中で止めずに施文する平行線文がのこる。胴部下半を欠いた5の中に、6がすっぽり入る形で出土した。6は復元するとほぼ完形になり、胴部下半にはタテ方向のミガキが施されている。7は内外面にハケを顕著に残す台付甕で、口縁端部はシャープに面取りされている。4～6は波状文を残しているが、7の台付甕と共に一括出土していることから、古墳時代初頭の遺物と考えたい。8は頸部、底部を欠いた壺形土器である。頸部に平行線文が巡り、その下に刺突文がみられる。そして波状文がまわり、その下にもう一段平行線文が巡る。全て同一原体で施文したと考えられ、原則として単位は3本。おそらく原体の先端に凹凸があるため、強く施文している頸部の平行線文は数が多い。



第5図 3号住居址

27号住居址 (第6図・図版3)

遺構 調査2区の北側で検出され、33・23号住居址によって南側を切られた住居址で、北側と西側が調査区外へと延びており、規模ははっきりしない。東側に煙道をもつがカマドはすでに壊されており、焼土・炭化物だけが残る。25号住居址より深い住居址だが、切り合い関係は不明である。

遺物 1・2は土師器で、内面黒色処理が施されている。2は大型で、底部には回転ヘラケズリが施されている。3～6は土師器甕、7は径7.8cm、高さ4.2cmの大型の土製紡錘車である。1・4・6はカマド内およびカマド周辺から出土している。

25号住居址 (第6図・図版3)

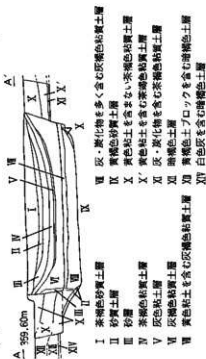
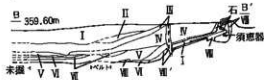
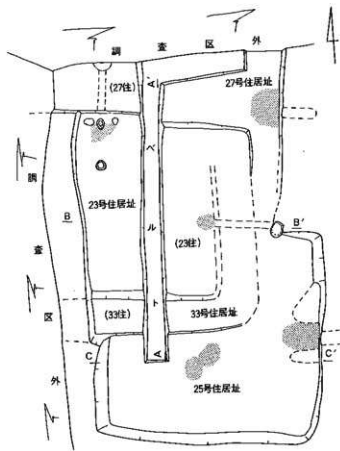
遺構 調査2区の北側で検出され、33・23号住居址に切られた規模4.4×4.8mの、不整形の住居址である。東側に煙道をもつが、カマドは焼けた黄褐色粘質土が袖の残骸として残っているだけであり、他に床面のほぼ中央には焼土・炭化物が残っている。27号住居址との境がはっきりせず、新旧関係はつかめていない。

遺物 1～6は須恵器環で、2・3には火だすきが残る。4～6には高台がつけられ、底部糸切り後回転ヘラケズリが施されており、体部は直線的に外開している。7・8は須恵器蓋、9～11は土師器甕である。9は口縁端部をていねいに面取りしており、10と共にカキメが顕著である。11は薄手で、外面にはケズリが施されている。12は須恵器甕である。2・7・8・10・11・12は、カマド内およびカマド周辺から出土している。

33・23号住居址 (第6図、図版3・4)

遺構 調査2区の北側で25・27号住居址を切って構築された住居址であるが、切り合い関係がつかめなかった。規模ははっきりしないが、北側のカマド痕跡は33号住居址のカマド、東側のカマド痕跡は23号住居址のカマド痕と考へたい。33号住居址のカマドには、袖の芯に使われた石の抜取穴と、支脚痕が認められる。

遺物 遺物はほとんどが床面より高い位置から出土している。33号住居址の1は内面黒色処理された土師器環、2は鉄製品で全長7.4cm、刃がつけられているが、腐蝕が著しい。23号住居址の1～6は内面黒色処理された土師器環で、6の口縁部は内寄しておりあまりみられない器形である。7・8は釉をハケ塗りした灰釉陶器で、7は器厚3mmと薄く丁寧なつくりで、口縁端部をわずかに外開させた甕である。8はやや厚手の段皿で、はっきりした段がついており、23号住居址の床面下より出土している。9・10は内面黒色処理された高台付の土師器皿で、口縁部は外反しながら開く。11は高環状の土師器脚部だが、これまでの市内出土例にあるようなスカシ孔は認められない。12は須恵器甕の口縁部、13・14は鞆の羽口で、羽口は他にも数片が出土している。



- I 茶褐色砂質土層
- II 砂質土層
- III 砂層
- IV 茶褐色粘質土層
- IV' 黄色粘土を含む茶褐色粘質土層
- V 黒褐色粘質土層
- VI 炭化物層
- VI' 灰色粘質土層
- VII 焼土層
- VII' 灰・炭化物を含む焼土層

- I 暗褐色土層
- II 黄褐色土ブロックを含む暗褐色土層
- III 白色灰を含む暗褐色土層
- IV 炭化物を含む暗褐色土層
- V 焼土を多く含む暗褐色土層
- VI 暗褐色土を含む黄褐色土層
- VII 暗褐色～黄褐色粘土層 (貼床材)

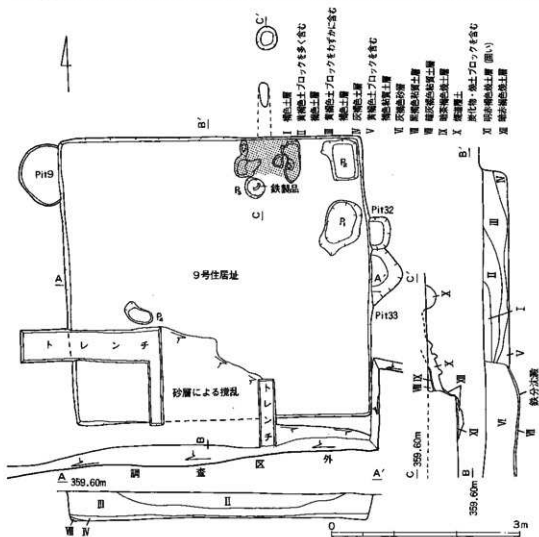
0 3m

第6図 27・25・33・23号住居址

9号住居址 (第7図・図版4)

遺構 調査1区の南西側で検出された、比較的残りのよい住居址である。規模は4.5×4.8mの方形で、南西部は砂層により攪乱されている。壁高は約40cmで、北壁につくられていたカマドはすでに破壊されていたが、焼土が固く残っており、長期間使用されていたことがうかがえる。床面は固く顕著である。

遺物 1～3は内面黒色処理された土師器環である。1はP₂より出土しており、糸切り後手持ちのヘラケズリが施されている。4は須恵器環で、底部は糸切り後ヘラケズリである。5は釉をハケ塗りした灰釉陶器の塊で、口縁端部をわずかに外開かせておりつくりはていねいである。6は須恵器蓋で、つまみは中がくぼむタイプになる。7はP₂内から出土した鉄製品で刃がつけら



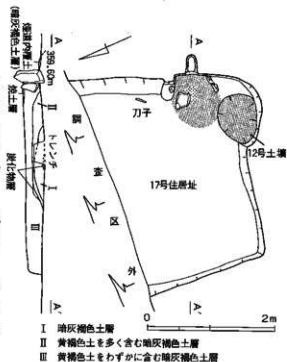
第7図 9号住居址

れており、刃と反対の位置に木質部が残る。この他に床面数ヶ所から骨片が出土しているが、小片のため詳細は明らかではない。

17号住居址 (第8図・図版5)

遺構 調査3区のほぼ中央で検出された住居址で、南側を12号土壌に切られ、北側は調査区外へと延びている。規模は一辺約3.6mの不整形である。カマドは軸の芯の石が片側に残る以外は壊されており、灰・炭化物が著しく残っている。

遺物 1・2は内面黒色処理された環で、底部は回転糸切りである。3は底部回転糸切り痕の須恵器環で、焼成はあまり良くない。4は内外面ミガキが施された高台付の土師器皿で、口縁部は直線的に開いている。3と4はカマド付近より出土している。5は床面から出土した長さ12.9cmを測る鉄製の刀子で、柄には木質部が残っている。

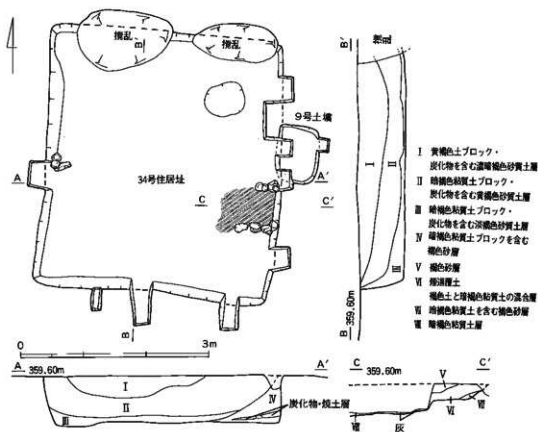


第8図 17号住居址

34号住居址 (第9図・図版5)

遺構 調査1区のほぼ中央で検出された住居址で、北側は攪乱によりほとんど破壊され、西側は9号土壌に切られている。当初は床面がはっきりしなかったため土壌と考えていたが、東側でカマドが検出され、住居址と理解するに至った。壁高は約80cmと高く、規模は約3.7×4.2mの不整形である。カマドは河原石を積んだものを軸の芯として使用していたようであり、その底面には白と黒の灰層が顕著に残っている。北東部の床面下に土器片が混入する落ちこみがみられたが、柱穴等ピットは検出できなかった。覆土は構築面とよく似た砂層が主である。

遺物 1～3は内面黒色処理された土師器環で、大型の1と高台がつく3には、底部回転ヘラケズリが施されている。4～8は須恵器環で、7は底部回転ヘラケズリ、8には底部ケズリのちハケ状工具痕がみられる。また、5の器高は3.1cm、7は3.3cmと低いものである。9は口縁部が直線的に開く土師器高台付皿、10は小型の土師器甕で、10の外側はカキメが顕著である。11は高環状の土師器脚部で、方形のスカシ孔が5ヶ所に穿孔されると思われる。12は覆土中層部から出土の釉をハケ塗りした灰緑陶器で、大型の把手付平瓶になる。13は外面に平行タキが施された須恵器短頸壺で、カマド付近から出土しているが、底部だけが上層から出土している。他に1・3がカマド内、2・6が床面より出土している。



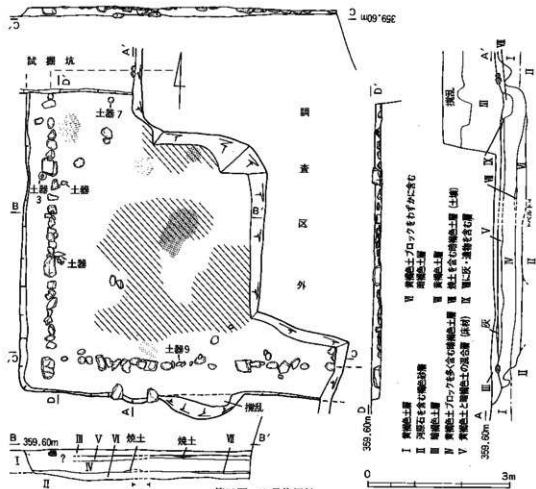
第9図 34号住居址

1号住居址 (第10図, 図版5・6)

遺構 調査1区の北東端で検出された住居址で、北側と東側は調査区外へと延びている。規模は一辺約7.5mと大形で、壁に沿って50cm程内側に、主に径15cm程の河原石を中心とした石列が巡る。石の配列はあまり密でなく、各隅とその間に2個、おおよそ2mおきに25×40cmほどの大角礫が配置され、大角礫だけが他の石列の石に比べて上にとびだしている。西北隅にも大角礫が検出されていたが、凍みあがって落ちてしまった。特徴のある形態のため調査区拡張が望まれたが、現在建物が建っているため不可能で、遺構の全容を把握することはできなかった。南側の壁際には約20×30cmの角礫が2個、約50cmの間隔で置かれており、建物を構成する施設の一部かと思われる。床面は均一でなく、タタキメられた面が島状に分布しており、焼土と灰が数ヶ所に散在している。カマドおよび柱穴等ピットは検出できなかった。壁高は約20cmと低いものだが、床面

下に約40cmの掘方を確認している。またセクションの観察によれば、壁と石列との間に、溝が確認できる。

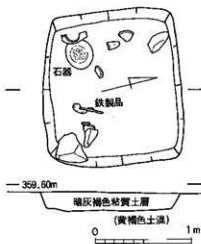
遺物 大形の住居址であるが壁高が高くないためか、図示できる遺物はあまり多くない。また、整理の際にまわりの住居址等からの出土遺物と多く接合しており、遺物が混在している可能性がある。1～3は内面黒色処理された土師器環で、1・2には底部回転ヘラケズリを施している。1は口径14.4cm、3は14.8cmと大型で、3は高台付で石列の間から伏位で出土しており、住居址が使用されていた時期を示すものと思われる。4は底部糸切り痕がみられる須恵器環、5は径16.6cmと大型の須恵器器蓋である。6～8は高台付土師器皿で、6は内面黒色処理が施され、高い高台をもち、口縁部は外反しながら開く。7にも内面黒色処理が施され、口縁部は内弯しながら開く。8には内外面黒色処理が施され、高台は非常に低いものである。9は須恵器把手付壺で、外面には自然釉を被っている。器厚は約4mmと薄く、つくりはいいいである。1・6・7は北隅の土壌状の落ちこみ内から出土している。



1号小竪穴 (第11図・図版6)

遺構 調査3区の東側で検出された遺構で、底部が平坦で顕著なため土壌とは区別し、また規模が1.45×1.6mと小さいので、住居址とも区別したい。深さは約20cmで、黄褐色土の混じった暗灰褐色粘質土層により、一気に埋まっている。周辺で柱穴を追ったが、検出できなかった。

遺物 1・2は底部糸切り痕がみられる須恵器環、3は大型の須恵器甕である。4は直径19.8cmの凹石で、一面には大きく深い窪みと小さい窪みが、もう一面には小さな窪みが多く穿たれている。5は河原石を用いており、使用痕のみられる敲石である。6は全長23.3cmの鉄製品で、断面は丸く、下側に土器が錆で附着している。2～6は床面において出土している。

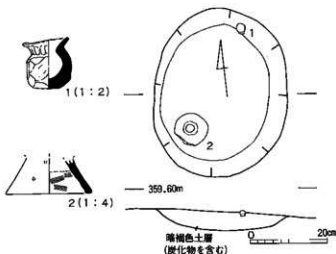


第11図 1号小竪穴

1号土壌 (第12図)

遺構 調査1区の東側、3号住居址の西側で検出された小土壌で、規模は35×45cm、深さが約5cmである。覆土は炭化物を含む暗褐色土層のみであった。

遺物 遺物は図示した2点以外は小片である。1は手づくねの壺形土器で口径2.5cm、高さ2.6cm、口縁部が多少欠失している。2は土師器台付甕の脚部と思われる。外面はハケの後、荒いミガキが施されている。

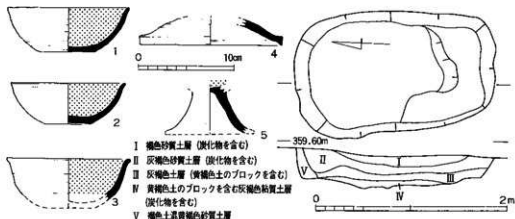


第12図 1号土壌

2号土壌 (第13図)

遺構 調査1区の東側で検出された土壌である。規模は1.3×2.1m、深さは約40cmで、楕円形を呈している。覆土には炭化物を含む。

遺物 1～3は内面黒色処理された土師器環で、1は底部回転糸切り、2の底部には手持ちヘラケズリが施されている。3の胎土にはわずかに雲母が含まれている。4は焼成時の還元が不



第13図 2号土城

充分のため赤褐色を呈する須恵器蓋で、つまみを欠いている。5は坯部内面黒色処理された土師器高環で、内面には顕著な指オサエ痕がみられる。いずれも高い位置から出土している。

その他の遺構と遺物 (第14・15図, 図版1・2・7)

調査1区において、5・12号住居址は、はっきりした遺構として検出することはできなかったが、確認できた床面直上からは古墳時代の遺物が出土している。5号住居址 (図版1) では、6点の遺物を図示できた。1～3は土師器甕で、1は口径20.6cmと大型で、口縁端部を平坦に仕上げている。2・3の甕の口縁端部は丸く仕上げている。4～6は小型丸底埴で、4は外面にミガキとハケが施され、5はミガキとケズリ、6はナデと指オサエとがそれぞれ施されており、これら6点はまとまって出土している。12号住居址 (第14図) では、坯部が穿孔されていない土師器小型器台と、口縁部に屈曲部をもち、S字状口縁台付甕の影響を受けたと思われる土師器台付甕の口縁部が出土している。また、12号住居址の下層からは、中期の弥生土器が出土している (図版14)。



第14図 12号住居址遺物

調査3区で検出した28・29・31・35号住居址 (図版2) はそれぞれ切り合ったうえに攪乱されており、また調査区外へと延びているため、遺構の全容を把握することができなかった。28号住居址出土の1～4は須恵器環で、1は底部ヘラオコシ、2～4はそれぞれ粘土塊から切り離れた後に板の上に置き、その後ナデを施しているもので、粘土塊より切り離れた際の痕跡は残っていない。2はやや焼きが甘く灰白色で、いくらか窯変している。3は口縁部の2ヶ所あるいは3ヶ所に、焼成後使用する際に打ち欠かれた痕が残っている。4は器厚約8mmと厚手で5mm前後の砂粒を多く含み、焼成が甘い。5は土師器鉢で外面は荒いヘラケズリを残しており、器厚は6～12mmと均一ではない。29号住居址出土の1～5は土師器環で、1～3に内面黒色処理が施されている。

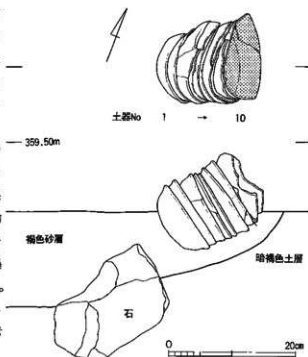
3の黒色処理は粗雑で炭化物が落ちかかっている。3・4は底部に手持ちのヘラケズリを施している。3と5の胎土は共に金雲母を多く含み、共通した点をもっている。6は底部回転糸切りの須恵器環、7は灰釉陶器の埴で、内面に重ね焼の痕を残し、釉はほとんどとんでしまわずに残っている程度である。ナアの痕が顕著に残り、あまりていねいにつくりとはいえない。8は釉をハケ塗りした灰釉陶器皿で、つくりはていねいである。9～11は土師器鉢と考えられる。いずれも内面黒色処理が施されている。9は胴部下半及び底部に回転ヘラケズリ痕を残している。10には胴部下半及び底部に手持ちのヘラケズリが施されている。12は高環状の土師器脚部で、外面には強いヘラケズリが施され、方形のスカシが穿孔される。13は土師器甕で、胴下半部にヘラケズリが施される。14は須恵器甕で口頸部が鋭く屈曲し、自然釉を被っている。31号住居址出土の土師器環は共に内面黒色処理が施され、1は胴部下半にヘラケズリが施されている。35号住居址出土の土師器環も、共に内面黒色処理が施されている。

単独で出土した須恵器把手付長頸壺（図版7—その他の遺物2）は、それ自身ひとつの遺構と考えて調査を行ったが、掘方等検出することはできなかった。内外面の底部、口縁部、肩部に自然釉が顕著である。表土剥ぎの際に重機によって体部を一部欠失している。高台裏面には、生乾きの際に板材の上に置いたと思われる圧痕がみられる。

灰釉陶器長頸壺（図版7—その他の遺物3）は調査1区で出土し、頸部から上が欠失しているが、胎土精選、色調灰白色で、釉がたっぷりかかっており、ていねいにつくりである。

調査2区で、土師器墨書環が一括して出土している（図版7—1～10）。掘方など遺構を検出することはできなかったが、内面黒色処理された環が10枚重なり出土した（第15図）。口径は11.8cm～13.0cmの間におさまり、12cm前後が多い。口縁部は一度内弯してから外反するもの（1～6）と、徐々に開いていくもの（7～10）とがある。全て底部に回転糸切り痕をもっている。器厚は8～10が約3mm、他は約5mmである。6・8・10を除く7枚にはいずれにも『壺□□』の墨書が書かれているが、書体は全て異なる。6・8・10は欠失部分があり、失ってしまった部分に墨書がされていたことが考えられよう。

他にも数点、墨書土器が出土している。



第15図 土師器墨書土器出土状態

IV ま と め

五輪堂遺跡第7次の調査である今回は、石列を伴う住居地の検出、同一文字が書かれた墨書土器の一括出土をはじめとし、いくつもの成果があった。本調査の成果の中から二、三問題提起をしてまとめたい。

1. 石列を伴う住居地（1号住居地） 石列を伴う住居地は県内で管見したところでは、表に示すように10遺跡から検出されている。攪乱や切り合いのために今までに完掘された例は少ないが、規模は一辺2.8～13mであり、6m以上の大形と、5m以下の小形の住居地に分けられる。今回検出された1号住居地は一辺7.5mと大形である。1号住居地の南壁には大角礫が張り出すように対置しており、出入口様の施設を想定させる。類例が松本市三の宮遺跡、北方遺跡、塩尻市吉田川西遺跡にみられる。また1号住居地から柱穴は検出できず、河原石の石列中に約2mの等間隔で並べられた上面が平坦な大角礫を、礎石として使用したと考えてみたが、北方遺跡にみられるように、礎石と思われる石をもちながら柱穴も併せもつ例があることから、単純に考えるのは危険である。掘方については、1号住居地の掘方は約40cmと深く、遺構検出時の壁高20cmに比べると倍近い深さである。他例では掘方についてほとんど触れられていないため比較検討することができないが、石列の礫を埋め込むために深い掘方をもったと考えられる。石列を伴う大形の住居地は、多くの場合ひとつの集落に1棟という割合で存在しており、またその特異な形態から、住居以外の特殊な用途をもつ建物と想定できる。そのほとんどにカマドが検出されているので、高床式の建物ではないようである。

2. 3号住居地 3号住居地は当初弥生時代の住居地と考えられたが、箱清水式土器の影響を強く残す土器を持ちながら、ハケメをもつ台付変形土器を伴っており、当地域の弥生時代から古墳時代への過渡期の重要な資料である。

3. 墨書土器 調査2区で一括出土した墨書土器に書かれている「豊□□」の文字は、1982年の五輪堂遺跡南高地点第2次調査において、2号火葬墓から出土した内面黒色処理された坏の墨書と同一文字であって注目される。五輪堂遺跡では他に「月」と書かれたものの他、数点の墨書土器が出土している。各々の文字の意味については、今後文献等の面からも研究する必要がある。

最後になりましたが、本稿をまとめるにあたり、長野県教育委員会文化課笹沢浩氏、副長野県埋蔵文化財センター樋口昇一氏、小平和夫氏、原明芳氏には多大な御教示を賜わり、また副長野県埋蔵文化財センターからは、未発表の資料まで提供していただきました。つきましてはここに、厚く御礼申し上げます。またこのような成果を残すことができましたのは、発掘調査に全面的に御協力くださった長野県歴代南高等学校、厳寒の中調査に参加くださった皆様の御努力の賜であり、心から御礼を申し上げますと共に今後の埋蔵文化財保護への御協力をお願いいたします。

	遺跡名	規模 (m)	方位面	時期	構造				
					壁高 (cm)	カマド	柱穴	石列のあり方	その他
小	1 長野市大宅内遺跡 423号住居址	3.0×2.8	(N-07°-W)	平安 (9C前半)	10-30	有	無	石列	扉は磚敷
	2 長野市浅川西条遺跡 4号住居址	主軸4.6×4.7	N-80°-E	平安後半	10-24	有	無	石列 溝溝中	
	3 小諸市宮ノ上遺跡 8号住居址	(最大3.9×3.2)	(N-89°-W)	(平安)	(0-12)	便宜的に化居址としたもの 石列が返る			
大	4 長野市高崎小学校地点遺跡 22号住居址	東西7.0×南北6.5	N-55°-W	奈良	30.5-85	不明	4本	石列	
	5 松本市下神遺跡 97号住居址	11.5×10.0	(N-79°-W)	(平安前半)	?	有	無	礎石(壁障部附属) 主柱4・カマド脇柱2	
	6 松本市三の宮遺跡	東西7.0×南北8.3	(N-90°-E)	平安 (9C後-10C)	?	有	(4)	1.8m間隔 の礎石 (3×3)	礎石間に 溝状遺構・ 張り出し (入り?) あり
	7 松本市北方遺跡 15号住居址	東西9.8×南北8.4	(N-81°-E)	平安後半	?	石組み カマド	主柱穴 4本	竪溝 礎石? (4×4)	張り出し (入口?) あり
郡	8 松本市南栗遺跡 505号住居址	東西約7×南北6.0	(N-86°-W)	?	約30	有	(無)	主柱および 8の礎石	
	9 塩尻市吉田山西遺跡 227号住居址	一辺約10.5	N-90°-E	奈良	50前後	石組み カマド	主柱穴 4本 他にも	石列	石列と壁 間に溝溝・ 入り溝跡
	10 飯田市飯川遺跡(寺地蔵) 70号住居址	一辺約13	(N-70°-E)	奈良	25-40	北東壁のみ検出			
					不明	壁障に 礎柱穴	石列		

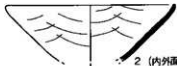
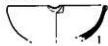
※方位は、カマドのあるものは主軸方向、ないものは長軸方向

表 長野県内の石列を伴う住居址

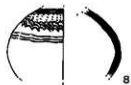
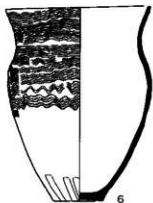
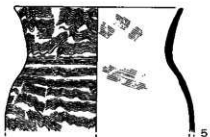
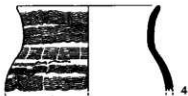
関係文献

- 1 「大室古墳群北谷支群緊急発掘調査報告書」長野県・大室古墳群調査会 1970年
- 2 「浅川西条一長野市に於ける扇状地形上の平安時代集落一」長野県住宅供給公社・長野市教育委員会 1975年
- 3 「宮ノ北一長野県小諸市宮ノ北遺跡第1・2次発掘調査報告書一」小諸市教育委員会 1981年
- 4 「塩尻遺跡群一塩尻小学校地点遺跡の第1次調査報告一」長野市教育委員会・長野市遺跡調査会 1978年
- 5 「長野県埋蔵文化財ニュースNo. 18」(財)長野県埋蔵文化財センター 1986年
- 6 「長野県埋蔵文化財ニュースNo. 19」(財)長野県埋蔵文化財センター 1987年
- 7 「長野県埋蔵文化財ニュースNo. 19」(財)長野県埋蔵文化財センター 1987年
- 8 (財)長野県埋蔵文化財センター小平和夫氏の御教示による
- 9 「長野県埋蔵文化財センター年報2」(財)長野県埋蔵文化財センター 1985年
- 10 「飯川遺跡群一一般国道153号塩光寺バイパス用地内埋蔵文化財発掘調査報告一遺構編」飯田市教育委員会 1986年

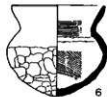
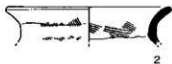
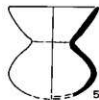
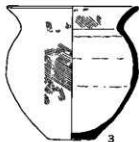
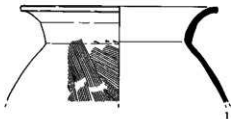
3号住居址



2 (内外面赤色涂彩)



5号住居址



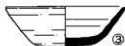
28号住居址



①



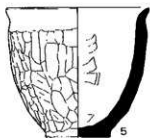
②



③

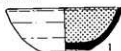


④

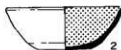


5

29号住居址



1



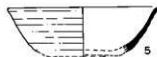
2



3



4



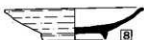
5



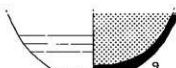
⑥



⑦



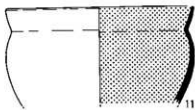
⑧



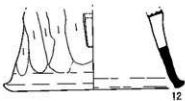
9



10



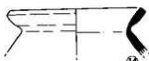
11



12

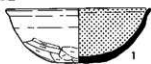


13



⑭

31号住居址



1

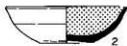


2

35号住居址



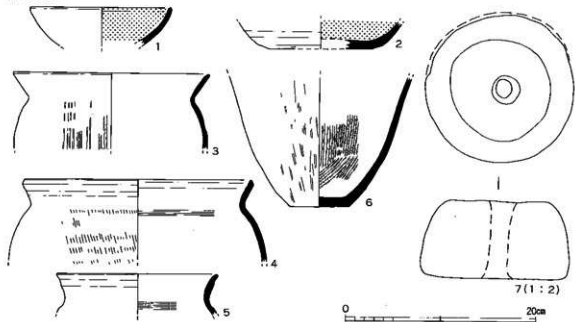
1



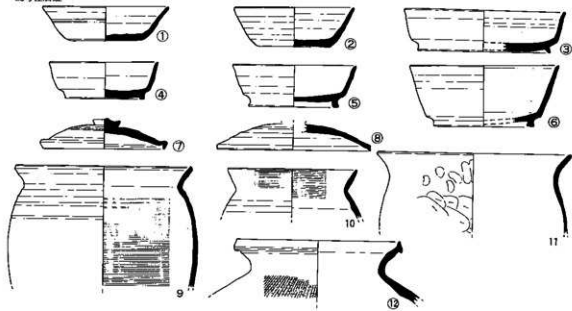
2



27号住居址



25号住居址

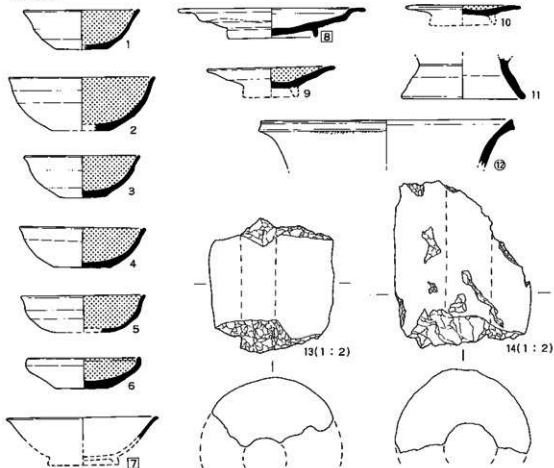


33号住居址

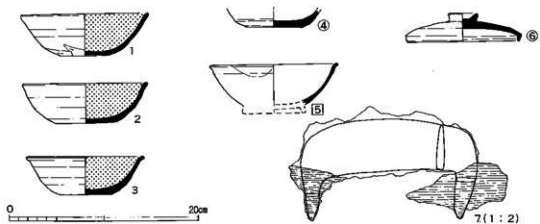


图版 4

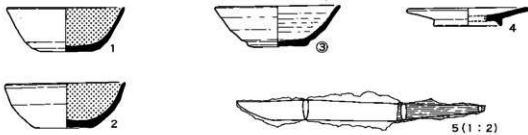
23号住居址



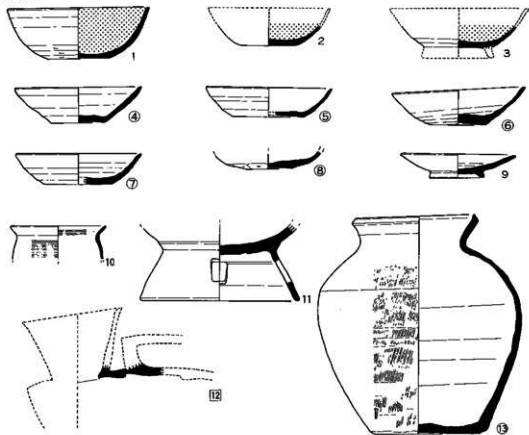
9号住居址



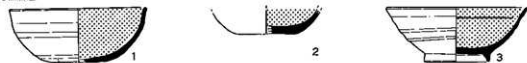
17号住居址



34号住居址



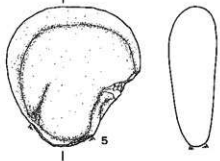
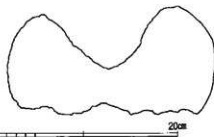
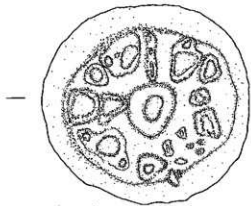
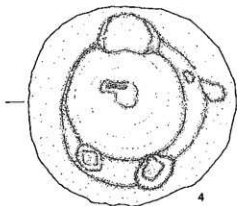
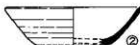
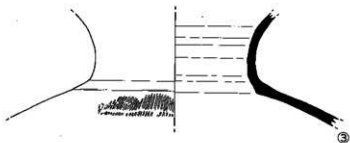
1号住居址



1号住居址

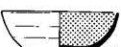
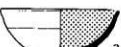
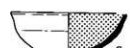
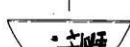
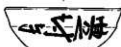
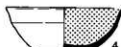
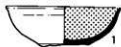


1号小壁穴

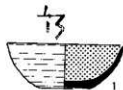
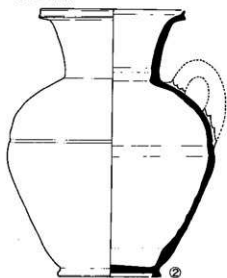


6(1:2)

土師器黒書環 (一括)

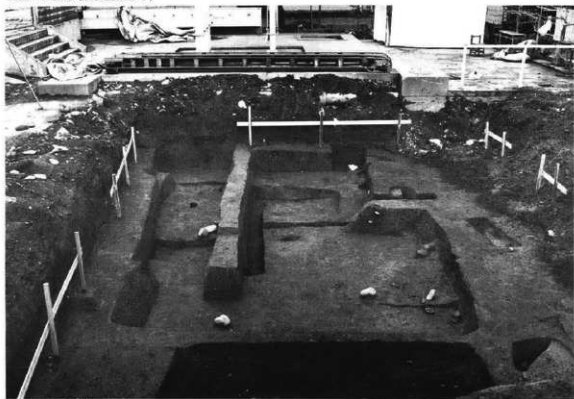


その他の遺物





調査1区全景(校舎屋上より)



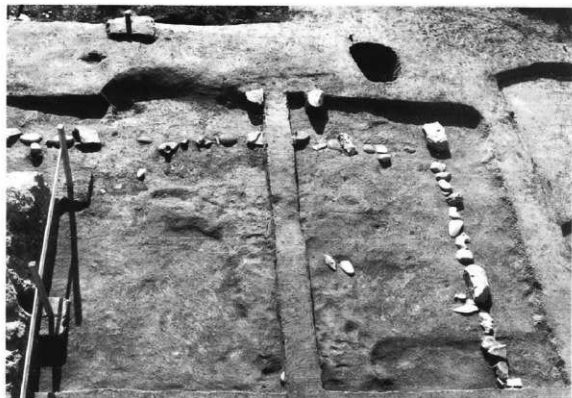
調査2区全景(南より)



調査3区全景(西より)



調査3区(東より)



1号住居址(北より)



1号住居址(南より)



2号・3号住居址、1号土壇(西より)



3号住居址遺物出土状態(東より)



3号住居址裏出土状態



9号住居址(東より)



9号住居址カマド(南より)



6号・7号住居址(西より)



1号小竪穴(東より)



1-1



1-5



1-6



1-4



1-8



1-7



3号住居址遺物(1-4・1-5・1-6・1-7は1:3)

12号住居址下の遺物



1-5



1-6



5号住居址遺物(1-3は1:3)



第14圖 1

12号住居址遺物

1-3



2-③



28号住居址遺物(2-5は1:3)

2-5



2-④



4-8



4-6

23号住居址遺物



4-7

9号住居址遺物



5-3

1号住居址遺物



6-6



6-4左

1号小髻穴遺物(1:3)



6-4右



7-1



7-6



7-2



7-7



7-3



7-8



7-4



7-9



7-5



7-10



黒書接写(縮尺不同)



その他の遺物(1:3)

五輪堂遺跡Ⅳ —長野県歴代南高等学校特別教室棟建設に伴う発掘調査報告書—

発行日 昭和62年3月31日
編 集 更埴市遺跡調査会
発 行 更埴市教育委員会
〒387 長野県更埴市大字杭瀬下762-2番地
TEL (0262) 73-2791
印 刷 信毎書籍印刷株式会社
〒380 長野市西和田470
TEL (0262) 43-2105
